

学術プラットフォームにみる将来と期待

研究成果物としての論文、論文がもつ影響度、科学知識の保存と共有 という各場面において、学術プラットフォームは今も肅々と進化し続けている。出版という言葉でくれば、それは戦いが二極化しつつあるとも言えるし、利用者という言葉でくれば、多様性と多機能化は果たして利用環境を 便利にしているか？新しい知見の発見や確認に貢献しているか？という 質問に辿り着く。生産者 (provider) ・ 仲介者 (navigator) ・ 利用者 (end user) の立場から、これら学術プラットフォームへの期待を総論する。



谷藤 幹子 (物質・材料研究機構 科学情報室 室長)

情報流通基盤強化の一環として、研究・学術情報の出版および研究コミュニケーションプラットフォームの WEB 開発に従事。2008 年より図書館経営の傍ら、マックスプランク研究所との機関横断型リポジトリシステムの共同研究に着手。17 年以上にわたる理工系学術誌の編集・出版および出版データの流通促進に関わった前職の専門知識を活かし、NIMS が支援する英文学術論文誌 (STAM) の出版を担当、2008 年よりオープンアクセスジャーナルモデルへ転換する。国内学術誌の出版コンサルタント、SPARCJapan 外部委員、およびエルセビア社 SCOPUS のコンテンツ & アドバイザリーボードメンバとしても活動。2005 年より現職。

最近の注目すべきメディア主張

1 週間くらい前に、「GLOBE」という新しいウェブ出版が朝日新聞から出されました。物材機構の研究者の紹介で知り、すぐに読んでみて非常に印象を深くし、今日のテーマにぜひ取り入れたいと思って引用してきました (図 1)。私は朝日新聞社とは全く関係がありませんが、朝日新聞に代わって言うことが許されるなら、「Globe」

はウェブという媒体であると同時に、マスメディアというものを記者の立場から考え直そうということがありありと分かる、非常に面白いメディアだと思います。「Globe」の看板は、「世界のどこかで、日本の明日を考える」で、特に私を感じ入ったのは「グローバルな視点」「現場からの視点」「リアリズムの視点」という三つの視点 (切り口) です (図 2)。



(図 1)



(図 2)

これら三つのジャーナリズムからの視点を読んだときに、すぐに学術プラットフォームのことを考えました。学術プラットフォーム上にいる作り手、読み手、買い手は、常にこの三つの視点を何らかの形で共有しています。それが具体的にどのような形かということは、学術プラットフォームとも共通する点が、「GLOBE」に具体的な試みとして紹介されているので、ぜひご覧ください。言うまでもなく、学術誌とマスメディアというのは、メディア、モデル、あるいはそのモデル自体が読者コミュニティを持っているという意味で、共通点が多いと思います。

ヒント 1: 読者と記者のニーズのマッチング

記事を読んでいて、学術コミュニケーションのヒントになると思ったものを二つほどピックアップしてみました。

まず、「What is Spot. Us?」というのは、読者が読みたいものと記者が追って記事にしたいものをマッチングさせる仕組みです。政治や音楽、芸術、あるいは太陽パネルの電池が家につくのはいつごろで、どういう形だろうかといういろいろなテーマに対して読者の人たちが寄付をして、それがある程度の額に到達すると、その記事について記者が取材をしてレビュー記事を書くという仕組みで、面白いと思いました。

ヒント 2: 誰もが発信できる時代

朝日新聞「GLOBE」では、いろいろなメディアの見方を論じているのですが、ここでキーになるのは、フラット化した情報社会になり、誰もが情報を発信できるようになったという点です。それを学術プラットフォームというコンテキストに置き換えると、出版社（者）に頼らずとも、研究者自身が出版できるようになってきているということで、二者の違いは出版内容の質（査読）と継承性であろうと思われます。

情報がネットで大量に行き来するようになり、論文の生産量が日本でも毎年 10% ずつ増えています。その中で、価値観の違いをどうコミュニケーションすることに持っていくかという「コミュニティの形成」が Blog や SNS などいろいろな形で流行っています。研究者個人が自分でホームページを作るという時代から、ホームページ自体がほかの人とコミュニケーションできるというインタラクティブな機能を持てる時代になって、大量の論文の中

ら、自分の論文のここが売りだ、ここを読んでほしいということを研究者が自分で主張し、読者の意見を受けることができるようになってきたという意味で、誰もが受発信できる時代だといえると思います。

しかし同時に、同サイトのくくりとして載っていた坂本龍一さんのコメントを読んで、なるほどと思ったのは、インターネットの時代になり、みんなが発言できるようになった情報がどこでも、ものによっては無料で見られるようになったという意味の民主化がもたらしたものは、一つ一つの情報の価値の低下だということです。これを学術誌に置き換えると、（学術誌の種類も雑誌数も、そして収録論文も増え）論文一つ一つが見えにくくなったということです。物材機構でも、1 年間に 1500 くらいの論文が発表され、個人の業績評価にも使われますが、それとは別に本来あるべき一つ一つの論文が持っている新しい科学的な知見や発見が、世界で出版される大量の論文の中で見えにくくなってしまったという現実があるのではないかと思います。

客観的な視点から見たジャーナル

今度は、論文一つ一つという視点から、ジャーナルというくりに視点を変えてみたいと思います。実は、私は SCOPUS というエルセビア社が発行している学術データベースのコンテンツアドバイザーボードの委員をやっております、日本で出版されているジャーナルをデータベースに収録する適正判断を担当しています。このボード委員に就いてから、（世界で発行される多種多様な）ジャーナルの価値と言うものが、どのように（どのような情報に基づいて）評価されるべきかということを変更して考えることとなりました。

SCOPUS には毎年 1000 くらいのジャーナルが収録対象として応募されてきます。質の評価をする委員会では、そのジャーナル一つ一つのタイトルについて、ジャーナルのサブジェクトはどういう収録カテゴリーに分類されるべきか、ということから、ジャーナルの質（学術出版物としての発行形態のほかに、実際に収録されている論文）はどうかということまで（大学、研究機関、企業から構成される各分野の研究者、図書館員によって）非常に多面的に、細かく見ていきます。そして各ジャーナルについて、このジャーナルがどういう状態にあって（定期的に発行されているか、査読体制や編集委員会の構成など）、だからデータベースの中に収録する価値がある

のかないのかということ、最後に理由をつけて投票することになっています。

その過程で、査読者はどういうコミュニティの人で、編集委員会の構成、国際性、論文が幾つ出ている、引用文献の広がり等々の、あらゆる情報を基本的にはジャーナルのホームページから拾ってきています。これを満たすために、各委員が自分の国から発表されているジャーナルのこれに相当する情報を全部探してくるという作業的にはちょっとつらい時代があり、そのときに私は日本の学会ジャーナル全部のホームページを見ましたが、情報の取得が非常に難しかったです。ジャーナルのホームページを見ると、皆さんが言いたいことは何となくデザインから分かるのですが、基本的なジャーナルの構成要素をホームページから探ることが非常に大変でした。それは、多分ジャーナルを作っている側と、客観的に外から見ている人の見ているものの見方が違うからだと思います。今、データの作り方、見せ方、売り方など、各場面でジャーナルという情報媒体の標準化が進んでいて、皆さんは作り手としてはよくご存じだと思いますが、ジャーナルの見え方をもう少し考える必要があるのではないかという気がしています。

(世界のジャーナルの多くは) 図書館側から、機関の職員がジャーナルをどのくらい使っているかを日ごとに見ること(モニタ)が可能なのですが、残念ながら、それができる日本の学会ジャーナルがほとんどないため、実際にそのジャーナルがどの程度に利用されているのかを、必要に応じて適宜に把握することができません。世界の常識でいえば、今ジャーナルにどのような利用価値があって、投資する価値があるのかということを経験で見ることができている時代になっています。物材機構が購読しているデータベースの経年推移の利用度数によって、図書館員が何をするかというと、これは論文も同じですが、データベースであれば1利用、論文であれば1ダウンロード当たりの単価を出し、単価が高いものを削減対象の目安にしているわけです。

日本の学術プラットフォームの現実

私自身が出版者であるとときに、日本のジャーナルについてもいろいろと合理化を図らなければならない(図書館経営の)立場にありますので、先日、私どもが購読している日本ジャーナルの出版社(学会)に手紙を出しました。私が手紙の中に込めたメッセージは、紙版・オ

ンラインジャーナルの購読契約が切れても買った期間のオンライン版は見られるようにしてほしい(あるいは出版論文のバックアップ提供)、また長期的に安定した供給をすることを可能とする価格の設定や閲覧条件を検討していただきたいというもので、無理のない打診をしたつもりだったのですが、海外のジャーナルのような方針説明や根拠の提示はほとんどなく、国内で出しているジャーナルと海外から出しているジャーナルの違いを改めて認識せざるを得ませんでした。基本的なところを押さえてほしいというのは、読者、あるいは読者を守る図書館としては強い願いでもあるわけです。

そういう意味で、日本の学術プラットフォームに立ち返って考えてみると、一つには「作り手」が図書館や読者に見えないという課題があると思います。なぜこの価格なのか、なぜ見られないのか、どうしたら見えるようになるのかという説明をするという、非常に基本的なところを私たちはもっと努力して見える化すべきなのではないでしょうか。そして、ジャーナルといっても、その主役はやはり「書き手・読み手」です。超一流の論文は、放っておいてもマスメディアが焦点を当ててくれますが、90%の論文は普通の論文です。その論文を書いた人たちがどうしてほしいと思っているのかを、いま一度考えてみるべきではないかというのが二つ目の論点です。

物材機構のある研究者に、「あなたが論文を出した後、どういうことをしたいですか」「どういうことをしてほしいとジャーナルに望みますか」と質問してみたところ、「読んでほしい人に手紙を書きたい」「読んでくれた人の感想を知りたい」「アクセスした人がどういう人かを知りたい」「何カ月もかかって書いた論文に対する反響を知りたい」といった、普通とも言える回答が返ってきました。

彼は材料系の研究者で、Scribdというコミュニティプラットフォームを例に話してくれたのですが、Scribdというのはウェブサーバがよそにあり、そこに自分の方からアップロードする形でドキュメントをシェアする、あるいは誰かに送る、ダウンロードするということに加えて、ここから自動的にBlogを生成することができるというものです(図3)。つまり、研究者が望めば、この機能を使って自分の研究テーマに関する生の声を送り続けることができるということで、論文を一回、ジャーナルの1アイテムとして出すだけではなく、さらにその

次に持っていく（コンテンツとして発展させる）ことができるようになっていきます（図4）。



(図3)



(図4)

日本の学術プラットフォームへの期待

今後の期待として、作り手としてジャーナルというカバーをつけて、あるいはオンライン版がいつでも見られて、いろいろな形でPRをする、例えばブースで展示するなどいろいろなことがあると思いますが、この時代だからこそ、やはりプロらしい差別化を考えてみてはどうかと思います。具体的に言えば、日本の学術プラットフォームという名前が持つメディアとしての公正さは、研究上欠かせないと思いますが、そのほかに、機能をたくさん追っていく多機能性よりも、確実に読めることを保証することがジャーナルの使命だと思いますので、説明ができない説明ではなく、もっと前向きな説明ができるジャーナルにしていく。また、私たちは日本人なので、やはり日本人に向けた情報公開を母国語で出すことを売りにしてもいいのではないかと思います。

それから、ジャーナルはサポーターというリピーターを増やすことが重要です。今は読者が何を考えているのかということ、いろいろな形で掘り出すことができるツールが出てきています。Blogもその一つです。そういう中から、学会の委員会や理事という窓口だけではなく、もっと広く会員や読者の声を拾ってきて、そのジャーナルならではの特性を目指す（特徴をだす）、学術プラットフォームはそのための技術というソリューションであるという順番なのではないでしょうか。読者があってこそその学術プラットフォームだと思います。